

NAB

2016

レポート

映像技術の “潮目”が 見えてきた



- ✓ 米の地デジに「ATSC 3.0」方式デビュー
- ✓ 伝送インターフェースは「SDIからIPへ」
- ✓ クラウドかオンプレミスか
- ✓ 加速するHDR制作
- ✓ 4K・8Kのカメラ充実

参加者が昨年に引き続いて10万人を超えたNAB SHOW 2016 (以下、NAB)。会場のいたるところに掲示されたテーマは「unleash yourself」。日本語では「常識を超えろ!」だろうか。岡本太郎流なら「バクハツだ!」という叫びにも聞こえる。本誌では、今回もシアトルに入り、レッドモントのマイクロソフト本社、EMC IsilonのIsilon開発ラボを訪ねた後、ラスベガスで開催されたNABへ参加するツアーを、総勢33人のメンバーで実施した。さらに、希望者はラスベガスからコロラド州デンバーに向かい、コムキャストの拠点と米国ケーブルラボを訪問した。

(文・写真：吉井 勇・編集部、写真：平石能敬)

「レッドモントで朝食を」 MSから本誌ツアーがスタート



シアトルからスタートするツアーとなって3回目を迎えた。訪問の最初は、シアトル隣のレッドモント市に、広大なエリアにいくつものビルが並ぶマイクロソフト (MS) 本社。ここをMSはキャンパスと呼ぶが、その一角にゲスト用カンファレンスルームがあり、そこでツアー恒例の朝食会から始まった。

プレゼンはTony Emerson氏「Video from the Cloud」とJohn Payes氏「More Personal Computing」の2つのテーマ。Emerson氏はMSのクラウドサービスAzureによるMedia Serviceの概要と事例を紹介。他社のクラウドにはない機能も有するAzureビデオサービスでも、特に強い関心のある、コンテンツ保護のセキュリティやデータの解析サービス、速いアップロード回線の確保などが話された。特に、データ解析サービスとマネタイズなどについてツアー参加者と議論を深めた。

次のPayes氏の講演では、HoloLendsの実演があった。昨年からの話題となっていたHoloLendsで、MSの狙いをあらためて印象づけられた。実際にある風景にCGを重ね、「本当はそこにはないが、あるように見せる」ことを目的とする「Augmented Reality」(拡張現実) 技術。MSはこれを「Mixed Reality」と呼ぶ。

MSはクラウドをベースに、さまざまな視聴行動の解析や、AR技術などで仮想化することで多様化している消費者に対応できる環境を備え、将来のメディアビジョンを描いている。課題はマネタイズだ。まさに今、斬新なアイデアあふれる成功事例の登場が待たれる。



「Video from the Cloud」をプレゼンする Tony Emerson 氏



ツアーメンバー (写真左) にホロレンズ体験をサポートする John Payes 氏 (中)